

直心影流

直心影流は江戸中期から明治にかけて隆盛を誇った流派であり、特に幕末に到って、男谷精一郎、およびその門下の島田虎之助、榊原鍵吉といった名人を生み出したことでも知られています。男谷精一郎（信友）は普段は妻を叱ったことさえない温厚な人物でしたが、剣の方は途方もない実力の持ち主で、道場破りがやってくると弟子には絶対に相手をさせず、全て自分があしらって見せたということです。島田虎之助は弱冠三十九才で夭折してしまいましたが、その実力は高く評価され、剣術だけではなく柔術にも優れていたということです。かの勝海舟が師事したことでも知られており、「剣は心也。心正からざれば剣もまた正しからず。先ず心を学ぶべし」という有名な言葉を残しています。もう一人の高弟、榊原鍵吉にも様々な逸話がありますが、中でも有名なのは明治二十年に行なった兜割りでしょう。この時に榊原鍵吉は出された兜を大上段から一撃で打ち割るという絶技を披露しています。生涯鬚を切らなかったことや、明治九年に廃刀令が出された時に、大小に変わる武器として倭杖（鍵付きの杖）と頑固扇（木製の扇）を考案したことも知られています。榊原門下からは野見(金に是)次郎と山田次朗吉が傑出しており、大東流の武田惣角も一時期学んでいたとも言われています（これには否定説もあり）。山田次朗吉は直心影流の技術を一冊の本にまとめており、また剣道に関する著作を数多く残しています。

直心影流で用いられる木刀は古流の中でもかなり太く重い方で、これを使って行なう「法定（ほうじょう）」は有名です。これには様々な術理が凝縮されているのですが、体や呼吸の鍛錬をかねて、ゆっくりと重厚に演武するのが特徴で、古流剣術全体を通してかなり異色の組太刀と言えます。この他にも小太刀や袋撓、刃引きを使った型がありますが、組太刀以外にも、榊原鍵吉が考案したと言われる、この流派独特の鍛錬棒もまた有名です。これは全長六尺、重さは軽いもので約12kg、重いものでは50kg近くのものまであるという代物で、これを頭上でぐるりと回すようにして大上段から振りかぶる動作を反復するのです。